

昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可  
六十年二月十五日 発行（毎月一回・十五日発行）

（通第四二七号）

## 次

639.25.  
④新鸞聖人の信仰 ..... 近角常觀 (1)

流念法海 ..... 池山榮吉 (7)

鑄型となりて ..... 井上善右エ門 (11)

殊玉のお歌 ..... 西元宗助 (13)

木村無相法語 ..... 岩崎成章 (15)

み名を杖に ..... 山村信子 (18)

一道会の記 ..... 榊原徳草 (21)

## 目

# 慈光

第三十七卷 第一號

# 親鸞聖人の信仰

## 近角常観

### 真宗慶嘆

真宗とは一つの宗旨の名であつて、禪宗にもあらず淨土宗にもあらず真宗であると云うたのであるが、然し乍ら親鸞聖人が初めて真宗と名付けられた当時は、そうしたえらびを付けて相対的に云われたのであるうか。成程一応はそうも云えるが、淨土宗に向つて簡びをつけて、自分の弘むるところを真宗と名付けたというのではない。

真宗という名は読んで字の如く、真実の宗教であると仰せられたので、今日の言辞で云えば仏教の精髓というと同じ意味である。真宗は一代仏教の精髓である、仏教の甘味をランビキにかけて紋りあげたところが真宗である、実際に法教の生粹というべきは真宗である。法照、本行卷によりそもそも真宗の二字に就て、その淵源を尋ねると、善導大師は「真宗匠遇」と云い、又「念佛成仏是真宗」と云うにはじまるのであるが、この時に於ては真実というが一の宗派であつて、他の宗旨と簡んで別に一宗を立てるなどと

云う意味は勿論あるのでない。

真実に仏の恵を我心に味い、口に稱するばかりであるが、その心に仏の恵を得た信仰そのものが、即仏教の精髓骨目であつて、この意味から真宗の名稱が出来ている。そこで真宗という言辞は實に味が深い、この点に就て詳論は出来ないが、一言云うて見れば法然上人が淨土宗を立てられた当時は非常に強く聖道諸宗に対し淨土宗という一宗を立てたのであって、如何にも対抗的に見えるが、退て静に法然上人の胸中を察するに、上人の胸中に所謂淨土宗の顕われ来つたのは全く絶対的である。法然上人は今まで仏の恵の無かつたところへ、絶対に仏の恵を云わんがために、淨土宗の名を立てたのであるから、或意味に於て非常に極端に淨土宗の名を立てて居られるが、かく非常にきわどく云わねば仏の恵が顯われて來ぬから、かゝる態度に出られたのである。上人は淨土宗という名前を立てることが出来るか出来ぬかということまで論じ定めて、聖道内の諸教を捨て

て、別に念佛一門を押立てられた。

これに反して親鸞聖人の真宗と云われたのは、法然上人の如く際立つて立たたのではなく、単に聖人の味、われたる他力の真髓を云いあらわしたに過ぎぬのである。尤も親鸞聖人の上にも「聖道権化の方便」と云われてはいるが、これとても他の宗派に対して際立てるよりは、他の宗旨の所談の如何にも拘わらず、聖人の眼に映じ来る仏の恵の真実を味うた宗旨であるというに他ならぬのである。それ故聖人の意を以て云えば、一代の仏教、教千の經巻は、仏の恵の真実を種々に説き頤わしたのであって、八万の聖教も畢竟は仏の恵を書いたので、それ以外に何ものでもないといふことになる。聖人の眼中には八万四千の聖教中、この仏の恵が肝腎である、仏教というはこればかりである。此外のものは厳密の意味でいうと仏教でない、換言すれば八万の聖教というも唯この仏の恵の一つが種々に現われ来つたのであるから、ランビキにかけて紋り上げて見れば、唯この仏陀広大の恵一つになつて仕舞うのである。かく云えどて外のものを捨てて仕舞うのではない。それは皆この仏陀の広大の恵みの中に含まれてあるのであるが、結局の生粹は仏の恵み一つである。この事は教行信証一部の上に充分現われて居る。

親鸞聖人が法然上人より教を受けられた有様を、

真宗紹隆の大祖聖人（源空）ことに宗の淵源をつくし、教の理教をきはめて、これを述べ給ふに、たちどころに他力攝生の旨趣を受得し、飽くまで凡夫直入の真心を決定しまし／＼けり。

と云うてある。聖人がこの時初めて仏陀広大の恵みに氣付いて心中に味い來りたところのものは、全く一代仏教の精髓である。一代仏教は含有的に仏の恵を説いたのである。たゞにそれのみでない、見るもの聞くもの、この人生万般の事ども、皆悉く仏の恵の外はなかつたのである。この如き信仰の円熟したるところから現われて来たのが「教行信証」一部の著述であるから、淨土真宗というのは或る一つの宗旨を説くにあらず、唯仏の恵の生粹を傾けたので、これが本来の真実の宗教である。

よりて聖人は「真実の教、淨土真宗」と云われた。私もこの真実の宗教に遇わせて頂いた上は、從てその広大な仏教を喜びて、口を極めて之を讚歎せざるを得ないのである。一体宗教のことは慶喜讚嘆の他は無い。經文を講義するとか、一部の聖教に就いて論究すると云うことは、宗教には不似合のことである。聖人の上で見ると全く慶喜讚嘆をせられた計りである。して見れば此度の講話も私が心に味わせて頂いて居る仏陀の恵みの泉を味わいつゝこれを讚美し稱えより外は無い。

## 如來本願(一)

真宗は仏教の精髄である、換言すれば仏の真実そのものである。その真実とは、聖人の言辞で云えば回向である。

「教行信証」教卷の首に曰く

謹で淨土真宗を按するに二種の回向あり、一には往相、二には還相なり。

聖人の一代は、聖人の信仰の示現であつて、其一代の思想言動悉くこの二字に攝り尽して余蘊なしと云うべきである。味えば味う程、味の深いのはこの回向の二字である。私はこれについて深く感じて居る。その所以は現時信仰の問題は皆この回向の字に帰するからである。この二字はまことに肝腎の文字である。

常に云々如く信仰問題は必ず人生問題から来るものである。釈尊は老病死を見て信仰問題に着目し給い、親鸞聖人も九歳の春、深き無常の感に打たれて出家し、十九歳の時に磯長の聖徳太子の廟窟に参籠して「汝の命根心に十余歳」の靈告によりて、いよ／＼無常の感を切にし信仰を求むること益急になり給うた。法然上人は仇敵の為に父君を打たれたのが発心求道の動機となつた。各宗派何れの祖師の求道も必ず人生問題を動機としていることは申す迄もない。かくの如く人生が苦であるとか、人が互に怨み合うのが苦であるとかいう種々の事情から気がついて真に依るべ

き道を求めるとして、色々苦しんで見ると、人生百般のことは、とても自力では行かぬことになつて、遂に仏陀に向つて来る。かく仏に向つてどうかして安心を得たい、落附きを得たいという、真に道を求める心が胸底に切実になつて、それからが正しく信仰問題である。法然上人と云い親鸞聖人と云い、全くこの点で苦しめた。この問題は簡単なようで実は大いに然らず、此問題の解決せるところ、即ち信仰問題の解決し終つたところである。私の苦しんだのは、初の間は自分は善いことが出来ると思つて大に得意になつて居つた。然るに後に及んで苦しみに陥り自分の立場を失つて以後半年以上もどうか安心を得たい、信仰に本づきたいと、このために頻りに苦しんだのである。回向といふ文字はこの状態を能く顕わした文字である。

回向とは読んで字の如く、自分の心を回わして仏に向けるので從て自分の作すところの善根も功德も仏に向けるのである。換言すれば人生百般の考を廻らして仏の方に帰向する。之を修行的から云えれば百般の自行を仏陀に捧げるとか他の為にするとかして、寸毫も自己の為にせぬが回向という文字の正当の意義である。彼の經典読誦の後あたりて「願以此功德平等施一切同發菩提心往生安樂国」という回向を唱えるがそれである。ところがこの回向といふ文字がこうした意味であるとは皆知るところであるが、實際は

至る。世間には動もすれば他力とは自分の力は駄目であると、投遣りに仕て居るのをば他力まかせの生活であるなどと云うて居るものもある。それは大なる誤りである、そんなことが他力と云うべきものでない。それらは例えれば道を行く人が足が進めなくなつて、途中に坐り込んだ如きものであつて、他力でドン／＼進んで行くものとは甚しき相違である。坐り込んで仕舞つた人は、他力即ち仏陀の偉大なる力の見えぬものである。私自分の経験から云うと、ああせねばならぬ、こうせねばならぬと色々と考えたが、つまり何事も出来ぬ。さればとて中止することも出来ぬ。そこに唯一つ現われ来つた道がある。それは何であるか、ここは口で云いあらわしきれぬ点であるが、強て云えば、自分には到底行えぬから、苦しんで居るものを見捨てたまわぬ恵が向うから現われたのである。併しもつ一つ云わねばならぬことは、此場合でも仏の御恵を欲しい／＼というて居る間は、それも尚一つの回向である。回顧すれば私はこの人生に何一つ頼みとすべきものが無くなり来つたとき、自分に対して眞実の恵を与えるもの、自分の心を全く知りぬいて、而も振り捨てざる眞実の友人をほしい／＼と思つて居た。

ここまで行きつまつて仕舞うと、そこがどうしても通りきぬ閑門である。多くの青年が皆ここに苦しんで居る。

これを極端に云えども、信仰に入らんためには真剣に仏を尋ねて信仰を求めるもの程、かえつて信仰には入り悪いと言つてよからう。現今求道者の中に、凡そ教育に關係して、自分の倫理実行のために、又自己の人格を高めんために信仰を求める人は、或程度までは善いが、どうしても絶対の信仰に入り難い。それは道德のために仏に接せん、自己のために信仰を得んとつとむる心が強くなる程、自分の回向心が退かぬから却て意外にも信仰に入り難いのである。私なども多少教育を受けた居た故、何分にも自分は他のものとは同じかるべきでない。何としても自分は理想的にやりたいと思うて居つた、此自力回向を運ぶ心が去り難かつた。然らば最後に如何にして安心をさせて頂いたか云うに、この点はどうも口には云えぬ、強て仮りに云えども、自然に向うから恵みが向ひて來たのである、意外千万である。前に向つて小さい光を求めて苦しんで居つたのに、後の方から大なる光が覆うて來た。前の方に一掬の水を探して居たのに、後の方から沸水をかぶせられた心地である。かくて自分は仏の恵に包まれたのである、仏の恵が先方から来たのである。それであるから信仰を求めるとか道を求めるとか云うに拘わらず、此信仰は求めて得られたのなく、先の方から来つて下された。

此の如く一点の光を、求め、一杯の水を求めて居つたのに、

録とか云う風の禅的なものであつて、自分は飽くまで我即仏の立場であつたらしい。平日はそれで修養して得るところがあつたらしいが、人生の最後は我即仏では安んずることが出来ぬから、其處で妻女達の奉じて居た他力的の信仰のものに転じたらしい。若し妻女達が仏教の絶対他力の信仰であつたら必ず彼も他力仏教の信仰に入る筈であつたろうが、最後の立場を失つた場合に方向転換して他力の信仰の形を取つたのである。是は宗派如何の問題ではない。最近の新しい事実であるから例として出したのである。要するに絶対の仏陀を見出しが信仰の極致である。たとい自己以外に仏陀を認めて居ても、其仏に向つて尚自分から回向心を運んで居る間は、絶対の信仰ではない。聖人が他力回向と云わるのは、全く言語上の事でも、研究上の事でもなく、はた法門上のことでもない、全く精神上に明に他力の回向を受けて仏の恵を味うて喜ばれたのである。

私は初めて仏の恵に浴した時、私はこれを云いあらわすに、「仏陀は慈悲の塊りである」と申し、この友達を得たのであると云つたのは、この恵に気付かして頂いたという意味である。「得たのである」というとこちらから求めて得たのでない、久しい以前から大なる恵みが我が身に臨んで居て下さつたのに気付かなんだのである。これは体験であるからこれ以上には云い得ない。十年前には此味が即ち所

意外にも先方より堂々と救の光、恵の水が現われて下さつた。是まで自分に対しても同情者を求めて居たのに、豈図らんや何とも云えぬ偉大なものが自分の心に入り満ちて下さつた。真に心の中には、有り難いと喜ぶ外は無い。我々は常に悪心を齎して仏に向わんと勤苦して居たものが、一大転換をして全く仏の方より我々の方に偉大なるものが向いて来て下さつた。そこで回向の意義も全く方向転換して顕われ来つて、仏陀より我等に回向して下さるという意味になつて來た。此意味を似てする回向が心に味われるところが信仰問題の結局である。聖人が「謹て淨土真宗を案するに二種の回向あり」と言われた回向は全くこの意味である。これも強ちに「教行信証」の文字を解釈のために云うたのではない、私の信仰問題を云うにあたり此点を云わねば仏の御恵の有難い味は云えぬのである。而して此点は實に仏教の真髓である。此に至つて仏教全体の方向転換を來るのである。

私は先日新聞を見ると、信州の代議士石塚重氏の死に就ての記事があつた。氏は一代の間仏教を喜んで居たが、死に先立つ三日、全くキリスト正教の洗礼を受けて死に就いたそうである。この事実を漫然と考へると仏教では真的安心が出来ぬから転宗した如く見えるが、私の信仰から推察すると、そうでない。彼の信じた仏教は心外無仏の碧巖

謂回向であるとは氣付かなんだ。今では回向とは全くこの意味であると知つていよいよ深く喜んで居る。斯の如く祖師の御言葉の如く自分の経験で味うている。

これ一つ見ても聖人の宗旨は明かである。回向文を見ても他力の回向という如きは調子はずれである。その調子はずれで來てあるのは、全く調子はずれの偉大なる経験から出たのである、尤もこのことは法然上人に既にあらわれてゐるが、併し聖人に到つて殊に著しい。



# 流念法海

池山榮吉

恐縮に堪えないと同時に、他面言いしらぬ満足を感じずには居られない。

さればただ一つなり  
「人居て喜ばば二人と思ふべし、二人居て喜ばば三人と思ふべし、その一人は親鸞なり」

私達は聖人とともに喜ばして頂けるばかりでない。その喜びの湧いて出る源、信心そのものについて、聖人のそれと私達のそれと、すこしの変りもないのを確信することが出来る。

「源空が信心も如来よりたまはりたる信心なり。善信房の信心も如来よりたまはらせたまひたる信心なり。さればただ一つなり。別の信心にておはしまさんひとは、源空がまゐらんずる淨土へは、よもまゐらせたまひさふらはじ」何ときびくした御言葉ではないか。他力信心の一大特徴はここだ。  
橋経紙

「大願清浄の報土には品位階次を云はず。一念須臾のあひだに、速疾に無上正真道を超証す」  
俊巻八三

私達はその智愚善惡を超越した一味平等の待遇に、一面

心絃ハタハタ 諧調

「哀哉、恩顔は寂滅のけぶりに化したまふといへども、真影を眼前にとどめたまふ。悲哉、徳音は無常の風にへだたるといへども美語を耳のそこにのこす」七百年の星霜をへだてながら、親鸞法然両聖人と一座して、心絃の諧調を感じることの出来るのは、一に如來よりたまわつた同じ信心の御蔭である。

「先に生ぜんものは後を導き、後に生ぜんものは先を訪ひ」相携えて同じ光を仰ぎ、同じ泉に酌み、同じ蔭に憩い、同じ道をたどる。その唯一の合詞は同じ念佛のほかにない。恋しくば南無阿彌陀仏をとなふべし

われも六字のうちにこそすめ

## 俱會一処

俊抄 678

「今生夢のうちの契キをしるべとして、來世悟の前の縁を結ばんとなり、われ後れなば人にともなはれ、われさきだたば人を導かん」

亡き妻が不治の病にかかるて、それとしれたとき、悲歎のなから、うれしさの身にもあまるを覚えたのは、この御文であった。

「樂しきはじめ憶ふ毎、哀しき終堪へがたし」やがて幽明境をへだても、心と心とは永久に結びつけられて、淨土の対面を期することが出来たからである。

## 無別道故

行巻七  
経巻九  
俊巻四

「同一に念佛して別の道なき故に、遠く通するに四海の内みな兄弟なり。」

世々生々の父母兄弟なる一切の有情は、一心帰命の一念に、同じ御親の愛子として、永久かわらぬここころの兄弟となり、會者定離の相對界の理法を脱して、俱會一処の絶対界に、この世ながらの志願を実成することが出来る。現に親子たり、夫婦たり、兄弟たり、朋友たる人々の間に、現に

二世の結縁が確認された暁は、独去獨來の心淋しさもおのずからうすらいて、有漏の穢身をそのままに、ともに淨土にすみあそぶおもかげさえもしのばれよう

安樂仏国にいたるには無上宝珠の名号と

眞実信心ひとつにて

無別道故とときたまふ

## 還相廻向

「お前に御信心がいただけなれば、親子といつても此世だけのこと、あの世で一緒になることは出来ない。だから是非御信心をいただいて、御淨土にまいられるようにならないではいけない。私は先に行つて待つてあるから。しかしどうしてもいただけなければまあそれでもよい。私が仏となつたら衆生濟度に出て、よしお前がどこでどうしていようとも、一番にお前を救い取つてあげようから」

亡き母が私の子供の時分、よくこういわれたのが、未だに耳の底にのこつている。私はどれだけこの言葉にひきつけられたかわからない。また信仰がぐらついて、如來が隠見出没していた頃、大分信的傾向から遠のいた矢先、この言葉を憶い出しては、にわかに後戻りをしないではいられ

なかつた。

今更おもえは、亡き母は、如來の御使として私に信仰をすすめ、かつは還相廻向の確信から、未通りたる淨土の大慈悲心をもつて、一子のために尽して下さつたのであつた。

往相廻向の大慈より

還相廻向の大悲をう

如來の廻向なかりせば  
淨土の菩提はいかがせん

弟子一人ももたず

信仰はわがはからいで得られるものでない。むしろ如來他力のはからいで、わがはからいのやんだところが信仰なのだ。わが力で獲られるものでない信仰は、またわが力で人にあたえられるものでない。それだから真に獲信の体験のある人には、わが感化で人に念佛をもさうせようなどといふ考えの起るはずはない。

聖人が「親鸞は弟子一人ももたざさふらふ」とか「如來の教法を十方にとききかしむるときは、ただ如來の御代官をまうしつるばかりなり。さらに親鸞めづらしき法をひろめず、如來の教法をわれも信じ、ひとにもをしへきかしむるばかりなり。そのほかはなにををして弟子といはんぞ」

て声となつたもの。それ以外に何かの意味が寓されていたら、その念佛は怪しいものだ。「親鸞は父母孝養のためとて一偏にても念佛申したこといまださふらはず」とあるのは、自然そななるので、そなした考のおこるのをしりぞけて、ことさらに念佛と没交渉たらしめるという次第ではないのだ。

これにつけて考えられるのは、私が、母の存生中、歎異抄を読むたびに、いつも母を側に呼びながら、今日はひとつ母のために読んで聞かしてあげようと思ったことは一邊もなかつたのは、孝行心のない私のことだから、そなつても不思議はないかもしけないが、それにしてもあまり変だと、われながら不審に堪えないことであつたが、ひとつとしたら、前と同じ理由によるものではなかろうか。

追善のための念佛がありえないとともに、同様の理由で、現世の利益を祈る意味の念佛もまたあり得ない。追善や祈禱の意味が念佛の中に打込まれるのは、まだ本統の信心がいただけていなないしるしだ。

(絶対他力と体験)

と仰しやつたのは、ほこりかにきこえるのをきらつて、ことさらに卑謙な言い廻わしをされたのではない。眞実内心の確信をそのままうちあけられたに過ぎない。

「この上は、念佛をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも面々の御はからひなり」とあるのは、一寸見ると、「自分はもう言うだけのことは云つてしまつた。この上はどうしようつと諸君の御随意だ、自分のしつたことじやない」といったよな、すこぶる冷淡な言い方と聞えるが、これもその実、信仰はひとえに如來の御催しによるという確信から出てくる坦懐な態度に外ならない。平素信者の間に立ちまじつて、御同朋、御同行と呼ばれたのも、やはり同じ思想のあらわれと受取れる。

他力の信心うるひとを

うやまひおほきによろこべば

すなはちわが親友ぞと

教主世尊はほめたまふ

一人々々のしのぎ

口傳鈔

「如來の教法は総じて流通物」だが、信仰は「一人一人のしおぎ」だ。

念佛は自分のすぐわれたありがたさに、内の思が口に出

## 雲の峰

疲れたる旅人の

あほぎみる大空に

さまざまの姿して

わきあがる雲の峰

わきあがりやがてまた

くずれゆく雲の峰

あはれそのさだめなき

まどはしの姿かな

わがたどる運命の

はてしなき旅の空

われはまた日毎見る

たのみなき雲の峰

# 鋤刑となりて

井上善右衛門

なつて攝取する働きを現する。これまさに真実なるものの止みがたい活動であり、ここに大慈と大悲が起ります。

金子大栄先生がある方との対話で、アミダ様とはどのような方がかという話になつたとき、「アミダ様はあなたの鋤型です」と言われたそうです。その言葉を聞いた咄嗟には「それがどういう意味なのか解らなかつたが、その後だん／＼と味が出てきて、有難く忝けないことだと感じていますと、その人が話して下さつたことがあります。仏教は釈尊の正覚に始まり、永遠の真実たる真如一実をその淵源とする教であります。ところが真如は人間の思惟や言葉の到底及ぶところではありません。『唯信鈔文意』に聖人が「法性法身と申すは色もなく形もましまさず、然れば心もおよばず言葉もたえたり」と申されているのがその事であります。如何にそれが真実であつても、我々に隔絶し超越したものであるかぎり、我々は救われるに由なきものとなりましょう。そこらがその真実が真実であればこそ、超越の状態に止まつていることが出来ないのです。総てを包み貫いている真実は、この身に降り下り私と一つに

止みがたい活動であり、ここに大慈と大悲が起ります。では此の私と一つになつて攝取するとは如何なる働きでありますか。先ず我々人間は時間と空間と分別の中で知り感じ考えるという業の制約をもつてゐます。この制約を超えては何事をも知ることはできないのです。この故に事実そのものは此の私に相応して法藏菩薩となつて我々の前に現じられました。先の『唯信鈔文意』の言葉に統いて聖人は、「この一如より形をあらはして……法藏比丘となりたまひて、不可思議の四十八の大誓願をおこしあらはしたまふなり」と申されています。しかもこの法藏菩薩はただ人間が感知できる姿を取られたというだけではありません。この私ども一人々々に相応じ一人対一人という働きとして現じられるのです。人間は顔が相違するよう各自が内面の個性というものを持つてゐます。これは理屈ではなく人間の事実です。外から見れば同じ人間でも内に入れれば

十人十色です。さらにまたその一人々々が各自各別の環境の下に生きています。かくて人間はどこまでも個別的存在です。  
普通に鋤型といえば目に見える形についていう言葉ですが、アミダ様がこの私の鋤型になつて下さるというのは、絶対に一人であるこの私自身そのものの鋤型となりたまつのであり、それは即ち言葉を換えると、私の業の鋤型となるのである。この鋤型に真如の水が入り満ちて私に通うものとなりたまつ。木村無相さんの詩に「涙には涙に宿る仏あり、そのみ仏を法藏という」とあります、まことに私の涙は私より外にはない涙です。その涙にちゃんと宿つて下さつているというのは、この私一人の涙にピタリと相向つて下さるアミダ様がましませばこそであります。無相さんはそのアミダ様と手を握り合つておられます。甲斐和里子女史が「み仏のみ厨子のうちぞ人知らぬわが悲しみの捨てどころなる」と詠うておられるのもまたその消息であります。

アミダ仏は私のすべてをみそなし、私の業に融け入つて私の悲しみを吸収して下さると共に、仏の万徳を私の胸に注ぎ込んで下さる。それが慈悲の御働きであります。超越の真如の水が鋤型に入つて私に交わり、私に流入して下さる。流入して下さるとは慈悲に値うて智慧の光を蒙るこ

とです。慈悲によつて我が心の畢竟依を得しめられるとき、その畢竟依が思わざるに我身を真実の徳に潤して下さるのです。白井成光先生の「彌陀仏のみ誓いゆえに天地のおづからなる寂けさに入る」という一首はしみじみと智慧光を仰がれた詠とります。  
どうしてこのような恵みに値うことが出来るのか。それは不思議の本願力によるというより外ありませんが、曇鸞大師は『論註』に「法身は無相の故に能く相ならざるはなし」と語り、また「真如は是れ諸法の正体なり、体如にして行すれば則ち是れ不行にして行なり」と味い、また「実相を知るを以ての故に則ち三界衆生の虚妄相を知る、衆生の虚妄を知れば則ち真実の慈悲を生ず」と述べ、統いて智慧と慈悲と方便の三門の相即一体の活動を語つておられます。仏の慈悲を「無縁の大慈悲」と云いますが、それは人間が縁をたよつて交し合う慈悲の如きものでないといふことです。私どもはただ／＼如來の大慈悲に触れて、その絶対の仏心に気づかされる外はありません。

一人々々の鋤型となつて現われ攝取し給う。その攝取に値う者はまさに「己れ一人がため」と仰がずには居られません。「彌陀の五劫思惟の願をよく／＼案すればひとへに親鸞一人が為なりけり云々」と申された聖人の述懐はまさにアミダ仏に値われた実感そのものと申すべきであります。

# 殊玉の歌

西元宗助

よきひとの仰せにききてみ名をよべば  
喚ばはせたまふみ声きこえぬ

右の歌は、池山栄吉先生（一八七二—一九三八）のお歌である。この歌を承ったのは、まだ学生時代のころ（昭和四年七月）のこと、そのときに受けた感動は、まだ昨日今日の如くに鮮烈である。わたし自身が、他力の信心の風光の一端を、仄かにもかいまみたのは、このときであつたのである。

池山先生（ご専門はドイツ文学）は、もと歎異抄から出てこられたような方で、殊に歎異抄第二条の「親鸞におきては、ただ念佛して彌陀にたすけられまいらすべし」と、よきひとのおほせをかうむりて、信するほかに別の子細なきなり」のお言葉を、まったく身読しておられた方であつた。げんに、「親鸞におきては」を、「池山におきては」と置きかえていただかれ、「よきひと」とは、まさしく御開山

悲招喚のおん声がじかに聞えてくるようありました。  
そう申せば、今ひとり思い起す方がございます。それは、

み仏を呼ぶわが声はみ仏のわれを呼びますみ声なりけり

と詠まれた甲斐和里子先生。和里子先生は前述の足利淨

円師の伯母君であられましたが、その九十二歳のお正月に、等持院の傍のお宅に年賀かたがたお伺いしたことがありました。すると、和里子ばあさん、ニコニコなさりながら、「ニシモトセンセイ、九十三になつても、まだ死にとうない。あきれたもんで」と、おっしゃりながら、十二・マンダと、おとなえになつて、さらにニコツとなさつた。そこで、あらためて思うこと。お念佛を最初に仰せになつたのは、どなたでおありなさるであらうかと言うことである。

いつたい、どなたであろう。法然上人か。いやそうでない。それなら善導大師か。いや、そうでもない。それでは釈尊でおありなさるか。いや、そうでもない。それでは、どなたであられるか。そのおん方こそ、われら一切苦惱の群生海を救わんがため、正信念仏偈に、五劫思惟之攝受 重誓名声聞十方。

とある法藏菩薩にてまします。法藏菩薩はわれら一切衆

親鸞聖人であられた。

したがつて、よきひと—親鸞聖人の仰せをこうむつて、「池山も、ただ念佛申させていただくばかりでござります。まことに、いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」—そのようなわが身であればこそ、ただ念佛でござります」と、いかにも感にたえぬように、満面に笑みをうかべ、目を輝かせながら仰せになつて一息つかれ、寂かにお念佛申されたのでありました。

○

このお歌で、まず思はせられることは、「よきひと」ということ。じつさい、この人生において「よきひと」に、出会うか、出会わぬかが、最大の重大事であることを、あらためて痛感させられる。その意味においては、わたしも亦、ほんとうに幸せであります。ありし日の、あの池山先生の、そして又足利淨円先生（ここでは述べるまぐなくて残念の、寂かな大悲の念佛を承つていると、たしかに大

生を救済せんと大悲の本願念佛を廻向して、「たとひ、われ仏をえたらんに、十方無量の諸仏、ことごとく<sup>音嗟</sup>して、わが名を称せば、正覺をとらじ」（第十七願）と誓い給うたのでありました。それを池山先生は「喚ばはせ給ふみ声きこえぬ」と、わが身にいただかれたのでありました。

○

その池山先生のお墓が、洛西の名刹・淨住寺の苔むしたところにございます。二メートル近くあるかと思われる大きい石の表には、池山先生ご揮毫の六字の名号が彫られ、裏面には、これも先生揮毫の雄渾な「汝一心正念直來」の二河白道の文字が刻まれ、その右脇にオネガヒダカラ、スグキテオクレヨと、振り仮名で親切な註をつけられている。

淨住寺さんは、苔寺や地蔵院の南にあって、小高い丘の上にある、楓と萩の多い黄檗宗の古寺で、観覽料なども一切とらない、ほんとうのお寺。そもそもその筈、この老住職の榊原徳草師は八十四歳になられる池山先生の高弟。お念佛に生きておられる方で、龍谷大学の千葉乗隆学長も京都大学の仏教学の梶山雄一教授なども、学生時代は、ここに寄宿しておられたと承る。有縁の方々、いちど是非、お参りなさるとよい。秋よし冬よし春よし夏よしであります。

# 木村無相法語

岩崎成章

シ  
私における信心のスワリは、歎異抄第二章の、親鸞においては、ただ念佛してミダにたすけられまゐらすべしと、よき人の仰せをかぶりて信する外に別の子細なり。念佛はまことに淨土にむまるたねにてやはんべらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん、総じても存知せざるなり。むづかしいこといらんのです。ただ念佛の一つです。よき人、聖人の仰せです。ただ念佛して弥陀にたすけられマイラスベレと。信心の奥は奥はとたづねれば、ナムアミダブツの声にこそあれ。お声が信心、お声が如来、真実信心は稱名念佛にこそれるなり。

世にウス皮マン頭あり、薄皮の中味いっぽいはアンコなり、アンコーパイを包めるものがウス皮なり。真実信心いっぽいを包めるものが念佛なり。真実信心と云うも、真実悲のことにて、稱名念佛は真実大悲の身一ぱいの顕現なり。

ひとたび勅命をお受けした上は、ひとたびお声がかかつた上からは、ただお声だけ、仰せだけ。

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

等覚寺師のオハナシに、機と法との有りのまゝが見えるばかりじや。すて、取ろうとするのはハカライじや。と。機と法のありのまゝが見えぬと、わが悪しき機をして、、法を取ろうとハカラウではならぬ。機と法がありのままにハッキリ見えると、機はたすからぬ機のまんまで、法をタノムほかないでの、機と法のありのまんまがハッキリ見えると、いうことが大切に存じます。

その機と法がハッキリ見えるということは、いつともしらずしのび込みたまゝ、この墮つる実機の背後に主体とし

てハタラキたもつ、仏智、真実信心様のオハタラキ、オハ

カライにて、スデに、大悲の御信心をいただいての上で、機と法を見せしめられているのであるから、機と法がハッキリ見えたああ、御廻向の御信心さまのオカゲと、機と法がハッキリ見えるということだけで、お助けの法がよろこばれることでして、それを、機と法が見えたその悪しき機を、とりして法を取ろうとするのは、ホントウにまだ機と法がハッキリ見えんからでありますから、ますますお聞かせいたかねばならんのであります。逆説、憚提、無信ということは、もちろん、良いハズはないが、御本願（法）をいたぐためには、無くてはならぬ機であります。それを棄てて、取ろう、とする機と法のありのまゝが見えていないからであります。

それで大量師は吉歌をひいておさとし下されたのであります。わが心をみなとりかえて御助けにはなく候、この機をば地獄なりとてとりしてお助けの機はいづくにかかる」と、

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

三河の吉蔵同行の言葉に、『弥陀は凡夫のウブを受けとる、善知識は、ウブにして渡すが役。私は、ただ凡夫の性のウブのまま、死んでゆくのじや』とある。

この「凡夫のウブ」ということ、「凡夫無相の自性、本性の、煩惱具足だけ」というところでしょう。まったく、マコトあることなしです。この私の凡夫の、自性、本性のウブのまま、日々、生きさせてもらい、死なせてもらう。そのいにかに「信者」らしいもの、「妙好人」らしいもの、「念佛者」らしいもの、「仏法者」らしいもの、十二ついらんようです。いるとしても、私にはツユチリホドも出来ない。その凡夫それぐの、固有の「マヨイゴコロ」「虚偽不実」「生死出離については、全く無能無力のまま」生きさせていただき、死なしていただく、ソレダケのこと。

悪衆生、邪見、無信の者なりで、生きさせていただき、死なせていただく、今さら、信者にも、仏法者になる必要もなく、なる力も全然ありませぬ。これなりで、ただナムアミダブツ、ナムアミダブツ、ナムアミダブツさまが仏法さままで、我れは仏法、ミジンもなしです。

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

(四)

“そのままの仰せ一つのお呼び声”  
ナムアミダブツ ナムアミダブツ

ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

ります。

真宗の人は聴聞のはじめから「そのまま」のござんにあつてゐるので「そのまま」よりどうしようもない「自分」の地獄一定が見えない、感知されなくて「そのまま」を、「このまま」に受取つてしまつて、一生アイマイなまま死んでしまうことになるようで、先生方や坊さん方の御教化の仕方もいけないのでないかと、まことに残念に思うことであります。念佛、念佛というが、念佛、ナムアミダブツといふことは、一面から、いただけば、如來大悲の「そのまま」という仏語が「ナムアミダブツ」という「仰せ」であるともいただけることでして「ナムアミダブツ／＼」とお念佛申し、お念佛を聞くことは「そのまま、そのまま」という如來の大悲の「仰せ」を聞くことともいたかれることでして、如來大悲といふも「そのままの仰せ」即ち「ナムアミダブツ」という「仰せ」のホカないことともいたしかせていただいています。

「お念佛申す」ことは「そのまま」との、如來の大悲心をお聞かせいただくことであるともいたしかれることであります。念佛申せよたゞかることあるともいたしかれることであります。

○ 美津子

かかる身に  
かかる光の  
かかる身に

## 遺詠「み名を杖に」より

山 村 信 子

み仏は我が苦しみの涙をば みつめ給ひぬ 金色の  
光して

(11・9・29)  
(26・3・2)

親子揃つてお淨土への道を歩かせ給へと それのみ  
片時も願う心離れず

(12・10・25)  
(26・3・2)

大いなるめぐみと今は思うなり八年の病いえがた  
けれど

京 都 時 代

龜 谷 追 憶

うつし世の業苦の中にみ仏の慈悲をおろがむあした  
夕に

(漏孔となり脛をとる)

み名にさめみなにねむりて朝夕のこの安けさよ  
唯ありがたし  
(30・11・30)

生きの身の苦惱のままにおさめとられ今は慈光を  
もろみにあびつ

生か死かわかぬ病む身をまかせまつり片時の間も  
はげむ称念

もうか?

み名となうこと一つにて生くるとうことの貴く  
思わる日なり

なやみみな消えてやゆかんみ仏のわれにたまいし  
みなとふれば

(34・11・28)

死は明日にあるやも知れず束の間も悦び生きん  
み手の中なるを

(40・7・4)

町の灯のまたたく彼方子は病めり 導き給へ共に  
仮土へ

(41・7・22)

念佛の花いただきて生きゆかんとのたまるる  
言吾のおしえに

(43・2・5)

念佛の花いただきて生きゆかんとのたまるる  
生も死もみおやと共に思いつつ寝ぬる今宵も

眠り安らか

苦しみて幾多経てきし歳月も今は眠りも安けく  
なりぬ

(46・11・20)

幸せとはかかるものかや命より尊き人のかたえに  
生きて

(46・12・3)

み碑持すえにし賜わりいくとせかきぎはしのばる  
春び待たるる

(46・12・3)

空に光みち 佛句  
空に光みち  
野に光あふれ  
風は笑つてゆく  
過ぎ去つた日々の  
ささらいの旅路よ  
悲しみにとざされ  
苦惱にあえぎ  
救いを求めて  
さまよっていた私の心よ  
香しいものの中で  
呼吸し  
どこからかさしてくる光に  
手をひろげ  
きこえてくる声に耳をかたむける  
光あふれ 句いみちて 私の心をつつむものよ

### 空に光みち

佛句

松風はみ名と聞こえておん寺は 新しき朝を  
静もりてあらん  
うす陽さす淨のみ寺に眠る子の魂かえりこん  
七たびの旦  
「慈光」誌をよみて  
椿咲くきよのみ寺に子の眠り安けくあらん豊の  
朝を  
ほそぼそと命つぐ身にみ名ありて冬のうす陽に  
椿咲く見る  
参道に冬の雨ふりみ碑立たしみ寺清らにしずもりて  
あらん  
こがねなす秋陽美しおんみ名に支えられつつ遅歩  
つぎて來し

(56・9・30)

思惟超ゆる世界のありと知らされてただに安けし  
今宵の眠り

### 西山淨住寺

松風はみ名と聞こえておん寺は 新しき朝を  
(48・1・1)

うす陽さす淨のみ寺に眠る子の魂かえりこん  
七たびの旦  
(48・7・7)

(48・1・1)

# 一 道會の記

(もう) 樺原徳草

本年は十月二十八日(日)午後一時から、故池山榮吉先生の

第四十七回忌、並びに故白井成九先生、故池山寿夫様、故松本解雄先生、故向島諦宣先生、故信国淳先生の追憶法話会の一一道会を開催しました。參集の方々は約八・九十名でした。先ず阿彌陀経の誦誦、続いて歎異抄第十章までの抨讀。私は毎年「幸に有縁の知識に依らずんば」の所で声が詰るので今年は勉めて軽く有誦しました。然し私には「有縁の知識」即ち「好き人」に邂逅することなしにお念仏に遭うことは出来ない。これは祖師聖人が法然上人に遭われたことによつて念佛されたことで示された通りであります。さて今年は川畑愛義先生、西元宗助先生、井上善右エ門先生、山田宰先生の皆様が、学会とかその他の御事情で欠席されました。それで花田先生に電話し、今月の「慈光」誌の先生の文を抨讀させて頂きたくお願ひしました所、先生からお話の原稿を送るとの御返事を得たので炎天に慈雨の喜びがありました。それを抨讀させて頂きます。

ヘレンケラー女史が、献身的家庭教師のサリバン女史を讃えて「盲で聾で啞の私が大学も卒業し五回までも世界を旅して身体障害者を慰問出来たのは、外からの教師は無用である、無くてはならぬのは、今一人の私である」と常に語っていた。外からの教師とは、よいことを教えてくれるが、そうなれぬと、仕方が無いと捨てられる。今一人の私とは、三重苦の身に、目となり耳となり口となつてくれる人である。

さて、私自身は初め、読めば解る、やれば出来ると身の程も知らずに居たが、手当り次第に学んだ二三の教に行き詰つて、眞実の教を知る力も、また行うことも出来ぬ、知目行足を仄く身であると知らされた。こうした身には、私の盲で塞の身を見抜かれて、何処々々までも今一人の私になつて下さる方のお育てが無くては、何時までも闇から闇の彷徨に終るほかはない。私にとって親鸞聖人こそその方

である。

然し猫に小判の譬で、そうした方のあることも知らずにいたが、幸に池山先生のお蔭で、歎異抄を教えていただき、聖人のふところに導き入れて下さったのである。

曠劫多生のあいだにも

出離の強縁しらざりき

本師源空いまさずば

このたびむなしくすぎなまし

と、聖人は恩師法然上人を渴仰せられたが、私には池山

先生のお導きで、本願の意趣を聞きひらかせていただけた

のである。この御恩、謝しても謝しつくせないが、四十七

回忌をお迎え申し、あらためて憶念の情切なるものがある。

さて先生は生涯を通じて歎異抄の何處かを教えて下さり、「本抄は全部読まねば解らぬ」というものではない。何處か一ヶ所が味えると、あそこもここも読めるようになる。恰も大海の潮の味は一掬すれば全体の咸味がわかるようなものだ。藤村の詩に、

耳を立つればなつかしや、あなたこなたに木隠れて

鳴く音をもらす時鳥

とあるように、歎異抄は如來のお声を聞く名所である。ただ大切なことは聞き耳を立てることである、と仰言つた

に、空しく父の名を呼び続けた故事を思い合せられて感慨に堪えない。

かつて先生が東本願寺の報恩講の日に、珍しく禮服を着られて、高倉会館で御講話をせられた。その髪頭に、群參の聴衆に向かわれて、

「皆さんは各地から来るべくと報恩の集いに参詣せられましたか？ サテ、聖人にお会い出来ましたか？ 何時！ 何処で！」

と問い合わせられて、隅々まで見渡されたことがあつた。四国の篤信者の鎌田晃氏が池山先生の追悼号「呼子鳥」に「信仰は、時と処を超える、尊きおしえ 師に知らされき。

聖人と七百年をへだつれど、会はれうるぞと 師はのたまへり」

と、先生の御慈育を嘆じていられる。

先生の岡山時代に、作州の法然上人の御旧蹟の誕生寺に詣でられた時、「列車が目的地に近づくにつれて、自分は今七百年を過ぎて上人をお詣ねしようとしている」と仰言つたことを思い出しているが、「信とはその人にお会いすることだ。それは外の姿貌ではない、心が一つに通う時にお会い出来るのだ」と念佛裡に淡々と語られたことも忘れら

して下さる聖人によつて、この如來の御心に直に浴させていただいている。恰も太陽の光を月光をとおして仰ぐよう。こうした聖人がましまさねば、懺念として仏心を解らせて貰えても、生きたまことの心に接することは不可能である。

併し、その聖人御自身は、「虚偽不実のわが身にて、無慚無愧のこの身にて、小慈小悲もなき身にて、等々」と、生涯を通じて悲歎懐されて、こうした親鸞のために、如來の廻向ますと、指差して下さるのである。

池山先生が、六高から甲南高校に転任せられた時、送別会を催した折、「君方は池山を信用して長い間よく聽聞して下さったが、さて君方とお別れしてから、業縁次第では、どうした罪業をあらわすかも知れないが、そうなれば、何だ、池山ってそんな奴だったのかと、みんな呆れるであろうが、聖人お一人は、何処々までも御一緒して下さる」と、念佛裡にお述べ下さったことは今も胸を打つものがある。

最後に、池山先生が、「親鸞におきてはただ念佛して」を繰り返えされるようになつたのも、四十二歳の御時に、

それまで努力された社会事業は失敗し、併せて痼疾に悩まれて、東京から大阪に移られた時、近角先生と沢柳政太郎

れないことであつた。

また、私が歎異抄に心うたれて聖人をお慕い申していた時、「聖人にお会い申すには、目を外に向けては駄目だ。目を内に向けなさい、そこに聖人は何時でも、何処でも、御一緒して下さるから」とも教えられた。それまでは聖人を求めて、御旧蹟やら、御伝記やら、御真影、御真筆などをあさっていたが、方向を一転して、自分の内心に目を向けた時、念佛が喜べぬにつけては、「親鸞もこの不審ありつるに、おなじこころにありけり」と同座して下さり、たまさかに、しみじみと有難く念佛申されるにつけては、「一人居てよろこばば」一人と思うべし、二人居てよろこばば三人と思うべし。その一人は親鸞なり」との御臨末の御書が答えて下さる。さらに、「さるべき業縁の催せば如何なる振舞もすべし」と仰言する聖人は、煩惱具足の我等が、業縁次第では、どうしたあさましい業界をするかも知れない、そうなれば一切の人々から呆れられ、捨てられる身に、聖人ばかりはそこにチャンと待つて居て下さつて、親鸞も同じ身だよと、手を取つて下さることに驚き始めた。

他山の石であるが、オーガスチンは「外に出るな、内にかえれ。内なる人にこそ真理は宿る」と云つてゐることも思ひ合はされる。観無量寿經に「諸仏如來は是れ法界身なり、一切衆生の心想中に入りたまふ」とあるが、私は同座博士の推薦で六高のドイツ語教授になられたが、そこで清貧と静閑さに恵まれて、念佛の御縁が熟し、今まで生命よりも大切に追求した名譽も、たとえ得られたにしても虚名に過ぎないと知られ、明日への希望を失われた時、フト「親鸞におきては唯念佛して彌陀にたすけられまいらすべし」と、よき人の仰せを被りて信ずるほかに別の子細なきなり」の一句が心に浮かび、親鸞の二字が金文字となつて畳にうつり、同時に、親鸞とあるのを池山とかえ、よきひとを親鸞聖人と読んで、聖人もそうされたのか、じや私もと、南無とお念佛が口に出た刹那、光の龍を浴びて、とめどなくお念佛がやめられなかつた。やがて、嗚呼これが信心であったのかと自得せられた、と仰言つた。

又歎異抄の七章に「念佛者は無碍の一道なり」とあるが、念佛に導かれて行く人に碍りが無くなつてしまふのではない。障りは身にもつ業報のままに絶えないが、さわりがあるまんまさわりとならなくなるのだと仰言つた。

たのまるる唯念佛のわれにあり、さるべき業はさもあらばあれ

と、御身辺に障りの多い中から念佛を讚仰された。

## あとがき

△  
近角先生の『親鸞聖人の信仰』からいただきました。実の宗教としての真宗の趣旨を知らせて下さいました。如來の本願を聞信させていたることが要であります。とく私共の煩惱満足のために神仏を祈ることの多い世に、願意に叶うことを生命とする聖人の信味を知らされ襟を正さしめられました。

△  
流念難恩法界の池山先生の御文は、大正十年に出版せられた「絶対他力と信仰」から頂きました。「実に是れ人生を以て紙とし、血涙を以て墨とし、骨内を以て筆として書かれた活字文である」と近角先生が序に讀えられています。鑄型となりての井上先生の玉稿は、我々を仏かねてしまふしめして、我身になりきつて下さる大悲の至極を述べて下さいました。

西元先生のお原稿は「大乗」の新年号に掲げられたものをお言葉により転載させて頂きました。山に向つてオーと呼べば、オーと舒（こだま）するよう、如來の招喚のみ声にこたえます。木村無相さんの一週忌もすぎましたが、信の上の言葉はいよいよ輝いてきます。岩崎成章師が紹介して下さいました。

み名を杖にの、故山村信子様の遺詠は、長い間の御病床生活、又御子さんを亡くされて、淨住寺に遺骨を納められました。

ての御心底を詠じて下さいました。お生れは津市で、京都女専の卒業、山村武雄氏と結婚。昭和二十年に発病、昭和五十八年十一月に逝去されました。文字通り御名一つに生き抜かれました。

一道会の記は、榊原師から早々に頂きました。私は老化の波にさらされて体力なく御伺い出来ませぬま、一文を草しました。

○  
名古屋昭和区の誌友で一年分の誌代を頂きましたが御名前が書いてありませんので、お知らせ願います。

二月の例会は休ませて頂きます。三月から開かせて頂けると思います。御諒承願います。（花田記）

定価	半年	八〇円（送共）	印刷人	坂部光雄
一年	一六〇円（送共）		名古屋市南区駄上二丁目古三九	
名古屋市南区駄上二丁目古三九				
編集・発行人	花田正夫	発行所		
電話	八二一局七〇三七番			
愛知県西加茂郡三好町太子福谷				
郵便番号	四五七			
振替口座	名古屋	八二三三三番		